STORYBOOK

みお と はると

ふたりの間に咲く花



ふたりの言葉と、重ねた時間を一冊に。

01

Prologue

君は、どんな明日を夢見ている？



草原のはずれで、キツネが荷物を並べていました。折り目のついた地図、小さな水筒、それから、種の入った袋。

「これは遠くへ行くための地図。こっちは、帰ってきてから植える種。……荷物が多い？ ぼくも、そう思ってたところ。」



キツネは種の袋を持ち上げて、また地面に置きました。

「丘の向こうを見に行きたい。でも夕方には、あの庭に帰りたいんだ。見つけたものを話せる相手がいたら、帰り道も楽しみになるだろう？」

「遠くの場所でも、いつもの朝のことでもいい。夢って、大きさを比べるものじゃないと思うんだ。」

「夢の話をすると、どこへ行きたいかだけじゃなく、何を大事にして暮らしたいかも見えてくる。ぼくが帰りたい庭の話をしたら、バラが初めて、その理由を知ってくれたんだ。」

「ぼくには、好きなバラがあってね。旅に出るのも楽しみだけど、帰って話す時間も、同じくらい楽しみなんだ。」

「夢を言葉に残すのは、君が大切にしたい暮らしを、相手にも知ってもらうためなんだ。大きな夢でなくていい。いつかこの本を開いたとき、ここから始まったんだねって、ふたりで話せるといいね。」

ふたりの言葉

はるとさんの言葉

夢

いつか海の見える街に暮らして、休日は大切な人と喫茶店を巡りたい。

みおさんの言葉

夢

季節の花を飾って、好きな本の話をしながら穏やかに過ごしたい。

02

Promise

君の見ている景色を、知りたい



「バラに、旅の話をしたんだ。」
キツネは、どこか楽しそうです。

「そしたらね、『わたしは、この庭に来る鳥の名前を全部覚えたい』だって。ぼくは遠くばかり見ていたから、毎朝違う鳥が来ることも知らなかった。」



それからキツネは、朝の庭で少し足を止めるようになりました。名前の分からない鳥を見つけると、バラを呼びます。

「会う前には、どんな話をしようって考える。でも、帰り道に覚えているのは、自分が知らなかった話だったりするんだ。」

「ぼくたちは、都合の合う夕方に、少しだけ一緒に過ごすようにしたんだ。旅の話をする日も、鳥を眺めるだけの日もある。会えない日は、また別の日に。そうして、ふたりの時間を暮らしの中に作っていったんだよ。」

「同じ夢じゃなかったよ。でも、バラの話を聞いてから、ぼくの庭に鳥が増えた気がするんだ。ずっと、そこにいたはずなのにね。」

「約束は、ふたりのために時間を作ることなんだと思う。無理のないペースで、話を聞いたり、同じ景色を見たりする。その積み重ねを、ぼくは絆と呼びたいな。君たちらしい時間を、少しずつ見つけてね。」

03

First Date

会ってみて、どうだった？



「おかえり。」

キツネは草の上を少し空けてくれました。

「ぼくにも、会った日のことを何度も思い返す夜があるよ。あの話は長すぎたかな、もっと聞けばよかったかな、って。」



「一度、バラに丘で見つけたものを夢中で話したんだ。赤い実のこと、変な声で鳴く鳥のこと。帰り道になって、バラの話をひとつも聞かなかったって気づいた。」

「次の日、何て言われたと思う？

『鳥の声のまね、もう一度やって』だって。」

キツネは、照れたように耳を伏せました。

「もちろん、ぼくのバラと君の相手は違うからね。相手の気持ちを、ぼくが代わりに答えることはできないよ。」

「ぼくは、あの帰り道のことを地図の裏に書いたんだ。あとで読んだら、バラにどう思われたか気にしていた、自分の顔まで浮かんできたよ。覚えているつもりでも、その日の気持ちは少しずつぼやけるからね。」

「会ったあとの気持ちは、きれいにまとまっていなくてもいいよ。君が書き残した言葉を、そのまま読ませてもらおう。」

「今日の印象を残すのは、いつかSTORYBOOKを開いたとき、あの日、相手を見てどう感じたかを思い出すためなんだ。うれしさも、緊張も、まだ分からない気持ちも。未来の君たちに、今の言葉を残しておこう。」

04

5 Reasons

君だから、気づいたこと



「バラの好きなところ？
もちろん、きれいなところ。……それも、本当なんだけど。」

キツネは前足を見つめて、考えはじめました。



「ぼくが道に迷った話をすると、心配したあとで笑うところ。新しい葉っぱが出ると、何度でも見せてくるところ。それから……」

数えるうちに、キツネの耳が少し赤くなりました。花びらの色を説明するよりも、ずっと言葉が出てくるようです。

「バラは、自分のそんなところを知っているかな。ぼくには当たり前になっていたけれど、まだ一度も伝えていなかったよ。」

「心の中で思っているだけでは、バラには伝わっていなかったんだ。言葉にして渡すと、何がうれしかったのか、初めて一緒に話せた。ぼく自身も、バラのどこを大切に思っているのか、前よりよく分かったよ。」

「変だね。花びらのことを話すつもりだったのに、思い出ばかり出てくる。君が見つけたその人のことも、ここにあるんだね。」

「好きな理由を言葉にすると、君が何をうれしく感じたのか、相手に届く。君自身も、その人を大切に思った理由を思い出せるんだ。五つは、点数じゃないよ。気づいた良さを言葉にして渡す、小さな習慣の始まりなんだ。」

05

Finale

この先、どんな日を重ねよう？



キツネは、小さな封筒を持っていました。端のほうが、何度も開いたように少し丸くなっています。

「バラに、手紙を書いたんだ。声に出すと照れて、途中で別の話をしそうだから。」



「遠くへ行きたい夢は、今もあるよ。でも、楽しみがひとつ増えた。帰って話したとき、バラが何て言うだろうって。」

キツネは封筒を裏返して、また表に戻しました。準備していても、渡す前には少し緊張するようです。

「君たちも、これからのことを言葉にしたんだね。同じ願いでも、違う願

いでも、まずは相手の言葉を読んでみよう。」

「手紙には、これまでうれしかったことと、これからしてみたいことを書いたよ。バラにも、バラの願いがある。渡したら、今度はその話を聞きたいんだ。ふたりのこれからは、ふたりで話して決めたいからね。」

「最初に思い描いた夢が、今も同じでも、少し変わっていてもいい。これからどう過ごしたいか、今の言葉を残しておこう。」

「手紙に残したのは、今の君の気持ちと、これからへの願いだね。相手の願いにも耳を傾けて、ふたりでできる小さなことから始めてみよう。時間を作って、言葉を交わす。その習慣が、この本の続きを育てていくんだと思うよ。」

大切なあなたへ

はるとさんからの手紙

ふたりの言葉から生まれた手紙
ふたりで会った日：2026年10月4日

みおさんへ

2026年10月4日、喫茶店で一緒に過ごしてくれてありがとう。好きな本の話で同じところで笑えたことが、今も心に残っています。初めは少し緊張していたけれど、あなたの笑顔を見て、自然に話せるようになりました。

僕の話を最後まで聞いてくれるところも、好きなものを楽しそうに話すところも、すてきだなと思っています。さりげなく気遣ってくれたことも、うれしかったです。何でもない会話まで、また思い出したくなる時間になりました。

海の見える街で喫茶店を巡りたいという僕の夢を、楽しそうに聞いてくれてありがとう。今度は、あなたが好きな本や景色のことも、もっと知りたいです。

これからも、お互いのペースを大切にしながら、気になる喫茶店を一緒に探したり、ゆっくり本の話をしたりできたらうれしいです。ふたりの小さな楽しみを、少しずつ増やしていこう。

はるとより

06

キツネからの贈り物

帰り道の分かれ目で、キツネが君たちを呼び止めました。口には、一冊の本をくわえています。表紙のすみに、小さなバラが描かれていました。

「渡したいものがあるんだ。」
キツネは本を置いて、少し照れたように言いました。



ページを開くと、ふたりが話した夢、初めて会ったあとの言葉、好きだと伝えた理由が並んでいます。いつの間にか、白かったページが埋まっていました。

「君たちが、相手のために時間を作ったこと。その時間の中で見つけて、言葉にしたこと。ぼくは、それをここに集めておいたんだ。」

キツネは、表紙のバラをそっとなでました。
「過ごした時間は、君たち自身が贈り合ったものだよ。ぼくからのプレゼントは、その時間に、また会いに来られる一冊さ。」

風が吹いて、最後のページがめくれました。その先は、まだ白いままです。キツネは何も書き足さず、本を君たちのほうへ押しました。

「いつか、この物語をふと思い出したら。あの日の言葉や、隣にいた人の顔が浮かんだら。そのとき、ふたりの間に、またバラが咲くんだと思う。」

「毎日、開かなくてもいいよ。読み返す日が来たら、あのときはこうだったねって、ふたりで話してみて。……さあ、これは君たちの本だ。ぼくは、バラの待つ庭へ帰るよ。」



ふたりの時間は、これからも。

STORYBOOK